

震災ののちはじめての稲刈りが浪江のまちでおこなはれたり
本田一弘

東日本大震災から九年、浪江町では、はじめての稲刈りだとう。情報をそのままストレートに表現する短歌は、古く季節歌などに見られるかたちである。汚染水の海洋放出などをふくめて、福島原発のことはまだまだ心配ごとが多い。

集まると勢いづける少年のような雲あり下町の空

鈴木陽美

「集まると勢いづける少年のような雲」という長い比喩がなかなか、いい。昔はガキ大将にひきいられた少年たちがそれぞれの町々にいた。そんな昔をぐつと引き戻すような、ノスタルジックな雲が思い浮かぶ。

雨の日のロビーが好きだひとびとの声が湿つて少し

やさしい

松元雅子

ホテルのロビーをイメージしていいのだろう。雨の中を来たばかりの人も時にまじっていて、乾いた空気とはちがう、なんとなく人と人との距離が近いような、独特の雰囲気がある。

脳の一瞬赤に染まりゆくこの一時に命がかかる

松森邦昭

外科医師の手術の現場詠。瞬間に出血し、それを素早く処理した場面だろう。「一瞬」と「一時」、二つの名詞が対比するように一首中にならべられていて、緊迫した空気が読み取れる。

ト口箱に銀の波なす太刀魚の波音とほる夜明けの市

短歌の現在

No.476 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

場

児島昌恵

短歌の文法で言うと「……太刀魚の」までが「波音」を起こす序詞ということになる。夜明けの市場にひびくセリの声の背景に、薄明の魚市場をつつむような波音が聞こえているのだ。

保育園仲間はとつくに買っていたラン活夏の陣出遅れる
奥村知世

「ラン活」という見なれない語が一首のポイントだろう。来春小学校に入学する子供用に、人気のランドセルを前の年に買ってしまふことらしい。商品や流行語など、できたての語がどつと小説に登場したのが俵万智『サラダ記念日』。1980年代のこと、もう三十年以上むかしのことである。

水の辺に大白髭草の息づけり花卉にうすく陽が射し
込んで
尾上 宏

「大白髭草」はオオシラヒゲソウと読む。花期は八月から九月で、白く丸い花を咲かせる。ネットで見ると、多くの県で絶滅危惧種に指定されている珍しい花らしい。今月のこの作者の一連には、この珍しい花に出あつた高ぶりが読める。この一首にも、貴重な植物に向かう心はずみを読んていいだろう。

お向かいのペランダにいるふわふわはイヌの皮着て
日陰に伏せおり
誉田恵子

向かい家のペランダにいる犬。下句のように表現することで、視線がしばらくそこにとどまっていたことが読